

**肥後** どうなんですかね。

**おか** プロダクトデザインを最初に選んだということが、意味があるんじゃないですか？

**肥後** 高校のときは普通の四年制大学、理系の大学に行こうかなって思ってた、ギリギリになって芸術大学っていうのがあるって知って、行きたいなって思ってた。その時にはとぎすでに遅しでデッサンとかやる暇もなくて。

**おか** 芸術大学がいいなって思ったときは高校三年生のときですか？

**肥後** そうですね、芸術大学っていうのがデザインとかテクノロジー的なものに興味があって、かたががカッコいいとかメカニックなものが好きとかいうそういう延長だったと思うんです。

**おか** そういうところに行こうと思ったのは何月くらいだったんですか？

**肥後** 一年は切ってたなと思います。

**おか** その時にもうそういうところに行ってみようと思ったんですか？

**肥後** 行ってみようと思いました。

**おか** デザイナーとかプロダクトデザインとかそういうのを目指して。

**肥後** そうですね。

**おか** それで大学受けてやっていったら、ちょっと自分の中で違うなと思ってきて。今やってる作品というのは、これがあったからこそ延長線上で繋がっているということなんですね。

**肥後** そうですね。

**おか** 面白いですね、そういった意味でいうと、プロダクトデザインからまたこっちにいったってというのがね。

**肥後** プロダクトで教えてもらったことは今役立ってますし、よかったなと思ってます。

**おか** すごいなー。よかった、プロダクトデザインの人がこの中になくて、やっぱり役立つもんですね。ありがとうございました。続いて、森井さん。森井さんのターニングポイントはなんですか？

**森井** 「就職活動」です。皆さんと比べて、すごい現実味を帯びたワードなんですけど。就職活動がターニングポイントで、私が大学二年生の後半くらいから進路は大学院に行く決めてたんです。自分は大学院に行くと思いついてたんですけど、だいたい三年生の最初か中間あたりに大学のクラスの中で、クラスメイトを

集めて、先生が「この中でアーティストになりたいやつ手を挙げて」と仰ったんですよ。私はそこで手を挙げられなくて。そのあと先生が仰ったのが「ここで挙げられないやつは、アーティストになんかなれないよ」って仰ったんですね。結構その言葉がずっと絵を描いてるときでも頭の片隅にいて。アーティストになるっていうことの質問に対してその時は割と否定的な言葉でしか返せてなくて。それでも絵は描くって状況が四年生の最初あたりまで続いていた。それもあるって分からないんですけど、絵の方もあまりうまくいかなくて。やっぱり大学院はアーティストになるために行くものだと思うので、このままの状態で行っても自分はもったいないし、絵を描くのも若干苦しかったので、苦しい思いをしたくないっていうのもあって、そのときはちょうど八月あたりのピークだったので、就職活動をしよう。

**おか** そこから？二年生のときにそういうことを考えながら、実際には夏から？

**森井** 急に気分が落ち込んで。通常就活は三月から始まると思うんですけど、私は夏休み明けの九月の中盤あたりから就職活動を始めました。そこで結果的に言うと、就職活動は私の場合は絵画なんですけど、終わりの見えない、完成が…、っていう感覚があるじゃないですか。いい仕事をしたって思っても、次の日朝起きて見たら「なんじゃこりゃ」みたいな。それでずっと見えない出口を永遠と探ってるっていう表現活動に対して、就職活動はエントリー受かりました、第一次受かりましたって明確に結果が来る訳ですよ。自分は人生を歩んでいるなと思って。

**おか** 実感はそこに湧く訳なんですよ。

**森井** 湧いて、正直気分的には楽でした。九月っていうと、大学の卒業は二月の九日から始まるので、周りみんな卒展に向けて作品を描いてたりするんですけど、私はその中で、まだ下地も生乾きのパネルと…進行度が一割にも満たない作品を横に、エントリーシートを書いて、その中で就職活動をしていたんですけど、就職活動してて希望動機とか考えたり、企業から来る返事のメールにどうきれいな文書で返そうかなとかその意識を一日の大半に使っていて。気持ちには人生が進んでいるっていう意味では楽なんですけど、漠然とその生きた心地がなくて、何か欠けてるなっていう気持ちが出ていて、その感じで就活はしていたんですけど、一社は落ちて、

二社めの最終面接の時に社長さんにある経緯で、私は営業職を希望していたんですけど、「絵を描いている君なんかいないからね。」と。

**おか** そんなこと言う、社長さんが。

**森井** まあ失礼だなと思って。でもやっぱり最終面接で、その時期になると応募してる会社も少ないっていうことで、「そうですね」って言っちゃったんですよ。

**おか** めっちゃクールですね。

**森井** 多分目は笑ってなかったと思うんですけど。そうですねって言って、そんな感じで第四次まであったんですけど、それが終わってその後学校に帰ろうとしている電車の中でそのことがぐるぐる回っていて。それに対していや、絵を描いている自分を捨てるってどういうことって素直に思えない自分が正直いて。そんな感じで過ごしていたんですけど、なんか知らないんですけど、その面接が通って採用になったんですよ。その第二次面接で反発意識でチャイナ服を着て行ったのに。

**おか** ちょっと待って。面接の時にチャイナ服着て行った？ちなみに中国でチャイナ服を着るっていうのは正装になるんですか？

**肥後** いや、普通はスーツですね。

**おか** 中国はスーツらしいよ。

**森井** 私服は自由って言ってたので。

**おか** すごいですね。

**森井** それでとりあえず一個は内定をもらってたんですけど、行きたい会社じゃないってことで、違う会社に…

**おか** そこはやめたんや。

**森井** そこは最終的にすみませんと。内定が一個決まってもここは行きたくないって思って違うところにはばっかけてたんですけど、でもとりあえず一個内定が取れたって思って、ちょっと安心するじゃないですか？そこでようやく一日の意識を絵に向けることができた日があって。だいたい十一月入ったくらいで。

**おか** ほんま時間ないね。

**森井** ようやく絵に意識を向けることができる日があって、そこでもう絵に向き合ってみると今まで就活に費やした時間のツケが回ってきて全然できてないじゃん、何をしてたんだってなって。ツケが回ってきて頭の中で自分のことを責めていて。それが最初らへんに就活していたとき生きている感じがしないって言ったと思うんですけど、その頭の中でぐるぐるしているのがたまらなく生

きている感じがして。

**おか** そういうことで自分がやっと気付いたというか、やっと生きる心地ということをそこで発見したわけや。そのきっかけが就職活動ということなんや。

**森井** そのおかげでそのまま三日後ぐらいにあんまり覚えてないんですけどさーと内定蹴って、さーとはっばかけてた会社にやっぱり辞めます、すみませんって送って。でもなんかそうやってアーティストになりたいっていうことを、ちょっとあんまり強い人間ではないのでバツと言える人間ではなかったんで、そのことが負荷になって、絵と誠実に向き合うことから逃げてた自分がいて。でもそうやってこう自分にとって表現行為はたまらなく生きてるってことを実感できる、そういう人間なんだって思って。ずっとカッコいい絵を描き続けたいか？っていう質問に対してはすぐにはいって答えられるようになったのも就職活動のおかげかなって思って。

**おか** 一本の映画を観てみたいですね。でもあれじゃないですか、結局その大学三年のときにその先生が言ったことがずっと頭に残っていて、それが言うたらトラウマじゃないけどもずっとあって、最終的にそれがどっか残ってたんかもしれないですね。結局大学入った時に自分はアーティストっていうものを目指して入って来たっていう、もわーんとしたものはあったんですけど、しっかりとそこでビジョンとして確立したってことですね。で、この作品を制作したっていうことですね。

**森井** そうですね。そっからが本当の地獄でしたね。

**おか** 十一月から掛かったんですよ。正式には。

**森井** その作品はだいたい本番で始めてきたのが十二月の二十日ぐらいですね。

**おか** どのくらい時間掛かったんですか？

**森井** 卒展が二月の九日からだったので大体二ヶ月くらいですね。

**おか** 二ヶ月くらいでこれをやったら。まさか就職活動がターニングポイントっていうのはちょっとすごく…皆さんどうですか？意外ですよ、そういう話っていうのは。ありがとうございます。皆さんお聞きいただいた通り、大学でこういうことを学んだり生活している中でターニングポイントがあり、現在作品制作をしていますということをご理解いただけましたでしょうか。さあ三つ目は何をするかというと、先ほどチラッと写ったりしてましたけど、アトリエと言いま

して制作をしている現場から、皆さん一人一人にそこにあるものを持ってきていただいています。つまり、その人がアトリエでどういった制作活動をしているのか？そういうことが垣間見れるということなんです。お待ちせしました。たぶんあれが出て来るんですね、鈴木さん。

**鈴木** 小さいんでちょっと分かりづらいかもしれないんですけど。

**おか** これ？さっき言ってた？これどう分解するんですか？これがどうなるんですか？

**鈴木** 黒の部分は製作の工程上、紐がなくなっちゃったら困るので繋がってて。なんかマスクみたいな。

**おか** ほんまや、タイガーマスクや。

**鈴木** 目とか鼻とか柄の部分が黄になってて、そこに穴の開いたマスク状の。

**おか** 穴開いてますわ、これ。まさか五十八歳にして皆さんに消しゴムを見せるとは思いませんでした。

**鈴木** 体とかも…

**おか** 体もバラバラになるんや。どうなるのこれ？中の黒い型というか…あっ、首とれた！ええー！今日一番の皆さんの「ええー」やね。また後で見てくださいね。これはケーキですね。

**鈴木** ケーキも普通に見えるじゃないですか？可愛いケーキで。でもなんか開けたら、こういう状態になっていて。イチゴが全部中で繋がっていて、クリーム部分の穴になっている。挿したらちゃんとケーキに。

**おか** 鈴木さん、面白いわこれ！

**鈴木** そうでしょ！？サンタとかね、めちゃくちゃ面白いんですよ。

**おか** サンタはどうなるの？

**鈴木** サンタはね、白い部分が同じパーツなんですよ。ひげと服の白い部分が一個のパーツで、顔とかも…

**おか** 顔も取れるの？うわっ、ええー！

**鈴木** サンタって普通子供に夢を与えるみたいな、可愛いもんやと思うんですけど、それを無情にも分解する。

**おか** はっきり言うけど、夢を壊してるもんね。

**鈴木** これを製作してるイワコーっていう会社の人は別にそういう面白い分解をしたい訳じゃなくて、工場の生産ライン上、仕方がなくて効率よくするために白のパーツをまとめていう。そこに面白いと思ってやっている訳じゃないってところが面白いなって。

**おか** 工場の広報の人みたい。ちょっと待って、これちゃ

んとつくれるの？元に戻せる？サンタさんつくれる？すごいね。これをアトリエのところに置いてるということですか？

**鈴木** 家に持って帰ったり、学校に持って行ったり、持ち歩いて。今飾ってある作品は分解したものが現実の法則に従ってるというか、りんごの箱を分解したら、ほんまに中がそうなっているようにりんごが割れていると思うんですけど、次からは、実際にはありえないような形に分解するっていう。それでちょっと人をくすつと笑わせる作品をつくりたいなって思ってます。

**おか** 今日のゲストは消しゴム博士の…、いや違うわ。へえー、面白いですね。ほんと博士になれますよ。後で皆さんもよかったら手に取ってみてください。続いて高畑さんのアトリエにあるものを。楽しいですね何が出てくるのかね。

**高畑** ここから歩いて五分くらいのところにあるスーパーの箸の袋で、可愛いなって思ってたやつを壁に貼ってます。

**おか** えっ？

**高畑** 作品にはあんまり関係ないかもしれないけど。

**おか** そんなことないと思うけど、まだ何か出てくる？

**高畑** 石です。

**おか** えっ？

**高畑** 平べったい石をいいなーと思ってる、部屋に飾ってます。アトリエというか自分の部屋で作業しているので。

**おか** これは？

**高畑** アイススクリームのふたです。コンビニとかで売ってるような。

**おか** これは？

**高畑** 飾ってます。作品には使ってないです。

**おか** 壁に貼ってるってことですか？

**高畑** 壁に貼ってます。アイスクリームのスプーンとか延着証明とかそういうの集めてて。

**おか** アイススクリームのスプーン飾ってるんですか？

**高畑** 木のやつとか。身近にあるものを集めるのが好きで。

**おか** こういうものを飾ってたらほっとする？

**高畑** ほっとします。

**おか** 例えば、これ一個無くなったりしたらどうなるんですか？

**高畑** 無くなってもそんなに…。

**おか** えっ？大事なもののなんでしょ、これ。

**高畑** 大事やけど、無くなったらしゃあないですよ。そういう日もありますから。

**おか** この三つの中で一番愛着あるのはどれなんですか？

**高畑** 愛着あるのはスーパーマルハチが…。

**おか** 確かに裏のこれ可愛いな。パッケージというか。

**高畑** こっちが私は妻やと思ってて…。これがすごい好きで。

**おか** あの、Mr.さんとか奈良美智さんとかもそうなんですけど、ここにドローイングとか描いたりして…

**高畑** とかはしないで。

**おか** それはしない？ここに飾ってるのが楽しい？

**高畑** 壁を作っていくのが好きでやっぱり。

**おか** なるほど、これで壁を作るのが楽しいんだ。僕も含めたコレクターなんかも、壁に作品を埋め尽くしていくという傾向があるんですけど、それに近いですよ。

**高畑** 近いですね。

**おか** いやーすごい、これでお腹いっぱいやわ…。さあ、范さんは何なんでしょうか？

**范** 変わってるものじゃないんですけど、大学のとき暗室で印刷した写真です。普通のプリンターじゃなくて、暗室で大きなところ。暗い部屋に入って、引き伸ばし機で光を当てて印刷します。暗い部屋にいとすごく落ち着けるから結構中にいて、五時間くらいずっと。

**おか** 暗室におれるんや。そういうところが落ち着くというか。

**范** 紙も普通の紙と違って印刷する前に光に当たったら終わります。印刷する前に絶対黒い袋に入っていてそのまま持って行って真っ暗の中で作業します。

**おか** これってずっとアトリエに置いてて、たまに見たりするんですか？

**范** しますね。これは大学の時住んでいたアパートの近く、家の周りです。

**おか** それをずっと撮ってた訳や。たまにこういうの見たらあのときこうやったなとか思い出したりするんですか？

**范** そうですね。

**おか** 一番現実的というか、どちらかというね。だから、ある意味家族って身の回りのものじゃないですか？身の回りのものの中に、何か一つちょっとしたヒントが隠されているのか、范さんの場合。

**范** 環境に影響される人だから、ここにいるのは作品として大きな影響与えるから、環境とか周りの人とか結構

いろいろ影響されて作品をつくります。

**おか** 例えば友達の家行って、こんな壁に貼ってたらどう思います？

**范** わたしは面白いと思う。

**おか** やっぱり芸術家やな。ありがとうございます。続いて肥後さん、何でしょうか？

**肥後** 二つあって、一つは持ってくるので、その間…

**おか** 何ですか？

**肥後** カメラです。

**おか** これカメラなんですか？昔のカメラなんですか？

**肥後** そうです、昔のカメラです。

**おか** これ写るんですか？

**肥後** 修復したら写ります。でもフィルムをここに掛けます。

**おか** あっこれフィルム掛けるとこなんだ。

**肥後** ここで巻いて、多分ここで写ります。

**おか** ここでやるんや。結構古い…何を持ってきたんねん！

**肥後** 置き場所と使えなくて困ってるものです。このカメラは蚤の市で買ったんですけど、すごいちっちゃいのめっちゃこころ…シャッターが切れて。ここから光が入って後ろにフィルムがあって写真ができるんですけど、こんな小さいのにちゃんと撮れるんやなって思ったんですけど、実はフィルムがすごい特殊なので使えなくて、結局使えないままずっとあって、これどうしようかになって思っ、文藝になってるんです。もう一つは蛍光灯なんですけど、これは卒制のときに使ったやつなんですけど、モノタロウで買ったんですけど、結構大きくて、蛍光灯ってなかなか使うことがなくて困ってて。

**おか** 使うから買ったんじゃないんですか？

**肥後** 使ったんですけど、今回の展示では使ってなくて、卒制の展示で使ったんですけど、あっそのときの話をすると、全然関係ないかもしれないんですけど、蛍光灯設置して、そこにある蛍光灯を取り替えたりずらしたりしてたんですよ卒制のときに。設置が終わって作品がいざできあがったなと思ったら、用務員のおじさんが二人来て、「蛍光灯切れてますよね、交換します」って二人組で蛍光灯取り替えようとしてて。明滅してるから切れてると思って交換しようとしてたんですよ。その話と全然関係ないんですけど、そんなことがあり、結局今蛍光灯、これともう一つあるんですけど置き場所に困ってて。一応アトリエっていうか大学にあるんですけど困ってるものたちです。

**おか** 結構蛍光灯ってでかいもんね。

**肥後** そうなんです。般ボールに入れたら1.5倍くらいになるので、さらにスペースも取って。

**おか** えっ、これって人にあげたりとかそういうものではないんでしょう？置いときたいんでしょう？

**肥後** 一応そうですね、置いときたいですけど、使う機会があんまりないので…

**おか** ここにいてる人で欲しい人いてたらあげます？

**肥後** 欲しいですか？これ。

**おか** いやわかりませんよ。今日来てるお客さんなんかで、ちょうど欲しい人がいてるかもしれないですよ。

**肥後** ありますし、家の蛍光灯とか。貰っても困りますよね。

**おか** またなんかで使うかもしれないですね。

**肥後** そうですね、もしかしたら。

**おか** だってきれいやもんこれまだ。

**肥後** そうですね、一回くらいしか使ってないです。

**おか** しかしアトリエにあるものって言って、これ持って来ますか？せやけどびっくりしましたわ。これ見てこんなでっかいの持って来たんやと思って。ありがとうございます。さあ最後、森井さんは何を持ってきてくれたんでしょうか。しかしすごいな、消しゴムにソフトクリームのカップに写真に…

**森井** 前の肥後さんが強烈でちょっとすべるなーとすごい嫌なんですけど。

**おか** 時計？

**森井** 時計です。私が描いてるアトリエがチャイムが聞こえづらっていうこともあるんですけど、やっぱり時間って有限じゃないですか？いい作品をつくるためには要するに作品自体、絵を描ける時間もありますし、それにコンセプトを練るためにも、本とか書籍を読んで私がこう一番最初に決めたコンセプトを絶対どっかの誰かが綺麗な文章でまとめてくれてるとか。いっぱいそういうのがある中で自分は何をやるかっていうことを模索しないといけない。でも作品も描かなきゃいけない。そうするとやっぱり時間の使い方っていうのがすごく大事になって。最近なんでも何日って、何なにまで何日って考えるようにしてて、大学院も入ったばっかなんですけど、言うたらあと二十ヶ月で卒業しちゃうなって思って。普通に時間を見るときスマートフォンで見れると思うんですけど、絵を描いてるときに、次この色をつくろうとなっているとき時間は何分やったっけ？ってぼちってボタンを押すと、その色のイメージが消え去ってしまうので、

バツと見られるアナログ時計が最強だなと思ってます。

**おか** 制作してる中で時間との戦いでこういうものが絶対必須のものだということですね。綺麗な色ですねブルーの。

**森井** 割れてるんですよ。

**おか** 割れてる？ほんまや、下割れてるわ。一番下のところが割れてて、ガラスが割れちゃってないんだ。それでも使ってるの？

**森井** 動くんで。

**おか** すごいな一動く限り使っちゃうってことやね。

**森井** 使いますね。

**おか** すごいですね、皆さんそれぞれ。さっき松長さんとも話してて、今回解体がテーマというか全体的にそういうようなイメージの作品があったりしますよね。そういうのも共通して見てて皆さん展覧会も見てて面白かったです。それと実はアーティストという存在っていうのは実際にはどういう生き物なのかということが今日はみなさんに分かっていたかだと思います。今回は五人のアーティストの方々にですね、作品の説明であったり、学生時代の思い出、コンセプト、アトリエにあるものをこういうかたちで見せていただきました。またアーティストの方に質問とかございましたら直接アーティストの方にお聞きしたいと思います。今日は二時間という長丁場でございましたけれど、最後までみなさんお付き合ひありがとうございました。もう一度アーティストの皆さんに大きな拍手をお送りください。